

■学位論文要旨（修士）

ポルトガル植民政策史 —発生から初期形成まで—

冠野博美*

2002年、東ティモール民主共和国は21世紀初の独立国として新しい歴史を刻んだ。この独立は21世紀はじめの独立国という大きな意味を持つとともに、長きに渡った植民地主義の終焉というシンボリックな意味を持つものであった。植民地主義の歴史に翻弄された東ティモールは独立後の混乱が未だ尾を引いており、国家運営は困難を極めている。治安の改善と貧困との戦いは今なお新政府の最優先課題である。東ティモールのみならず、旧植民地である独立国の多くは、旧宗主国の政治、軍事、宗教、文化、言語の大きな影響とそれを巻き込んだ上に成り立つ独自の社会によって成り立っている。1970年代に次々と独立したアフリカの国々も例外ではない。例えば、1975年にポルトガルから社会主義国として独立したモザンビークは、1992年まで続いたモザンビーク民族抵抗運動（FRELIMO）と政府軍による17年間の内戦により国土は荒廃し、現在も主要な交通インフラは破壊されたままである。

こうした旧植民地の抱える解決しがたい現状を考えると、現在抱える問題考察の上での出発点を、植民地政策の始まりである大航海時代へと置いてみる。植民地支配は14世紀から16世紀初頭にかけて行われたヨーロッパの拡張、「大航海時代」に端を発す。この考えの下に、旧宗主国と旧植民地の出会いである「大航海時代」の歴史を紐解くのが本論文の狙いである。ポルトガルは、ゴア、マカオ、東ティモールに長い間植民地をもっていた。ブラジルもポルトガルの植民地であった。

* 京都女子大学大学院 現代社会研究科
公共圏創成専攻

ポルトガルが、大西洋のアゾレス諸島、マデイラ諸島、カボ・ベルデ、サン・トメ、西アフリカのアンゴラ、東アフリカのモザンビークから、日本の長崎にいたる長大な地域で点（あるいは面）の支配をしていた。アゾレス諸島、マデイラ諸島、カボ・ベルデ、サン・トメ、ギニア、コンゴ（一時期）、アンゴラ、モザンビーク、ゴア、マラッカ（一時期）、マカオ、長崎、東ティモール、さらにブラジルをつないで見えてくるポルトガルの植民地支配とは何か。ポルトガルの植民地政策については、大航海時代からその終わりまでは、植民地政策の発生と形成期に当たる。東ティモールやアンゴラ、モザンビークの現状を生み出した起因となる発生期、つまり西洋諸国が海外に目を向けた大航海時代の始まりからの歴史をもう一度見直すことで、現在の旧植民地が抱える問題を一連の流れの結果として捉え、旧植民地に残る問題を新しい側面から把握することが出来るのではないだろうか。前近代から後近代にわたる期間を再検証することで、現在の旧植民地であった国々が抱える問題の根を把握する手がかりにしたい。

15世紀の末、世界はスペインとポルトガルによって分割された。ポルトガルは地球を東回りに、アフリカ大陸南端の喜望峰を経由し、インドに達した。スペインは地球を西回りに、西インド諸島に達した。この航海とその後の支配こそが、ヨーロッパの植民地体制の始まりである。ポルトガルはイベリア半島の西端の小国であったが、他のヨーロッパ諸国に先駆けて航海を始め、大航海時代を牽引した国

であり、世界システム論での最初の覇権国であると言える。ポルトガルの世界支配は注目に値するものである。本論文はポルトガルの植民政策史を発生期から初期形成期にかけて史実をもとに考察したものである。副題の「発生期」とは、ポルトガルが対外進出を始める大航海時代の背景である14世紀末とし、初期形成期の終わりはポルトガルの大航海時代の終焉である17世紀後半までとした。

論文の前半では、ポルトガルの14世紀末から17世紀後半までの歴史を、ポルトガルの隆盛と拡大と退潮という視点から史実を明確にすることに努めた。15世紀に海外拡張を始めたポルトガルは、地理的利点、レコンキスタの精神、十四世紀末の封建制度崩壊による政治的再編成、カスティリヤとの和平による国内の安定に支えられ、大航海時代の先駆者となったことが背景にあり、第一章はここからポルトガルの大航海時代を大きく五つの年代区分に分け、史実を追った。五つの年代区分は、(1) 大航海時代へ進む背景から、アフリカ大陸のセウタ攻略までの海外拡張思想の基礎となった時代。(2) アフリカ海岸線の冒険の権利を得たリスボンの大商人フェルナン・ゴメスの契約（1469年）から1498年のヴァスコ・ダ・ガマのインド到着までの時代。(3) 1550年までのポルトガルの交易の中心であったインド洋交易国家（Estado da India）の始まりからポルトガル王室の香料貿易独占の時代。(4) 1580年から1620年の間にはポルトガルの交易独占は崩れ、オランダとイギリスがインド洋での交易へと参戦し始めた時代。

(5) 1620年から1668年にかけてのスペイン併合時代とスペインからの独立の五つに分けた。以上の記述のなかで、ポルトガル拡張の前史として、現在ポルトガル共和国の一部を構成するアゾレス諸島、マデイラ諸島への入植、拡張の出発点としてのセウタ攻略（1415年）、拡張期におけるエンリケ、マゼラン、ガマ、フェルナン・ゴメス（大商人）、コヴィリヤン（冒険軍人）、バルトロメウ・ディアス、アルメイダ（初代インド副王）、アルブケルケ（第二代インド副王）、ザビエルなどの活躍、プレスター・ジョン（東のキリスト教国）への思い込み、さらにスペインとのアルカソヴァス条約（1474年）、トリデシャス条約（1494年）などを論じた。イエズス会のフランシスコ・ザビエルによる布教や、種子島での火縄銃伝来が知られている日本とポルトガルの関係も、ポルトガルの大航海時代における一連の流れの中に取り込まれており、日本はポルトガルにとってマカオを拠点とする銀貿易の銀産出国として重要な位置にあったことは興味深い点である。

本論後半では、ポルトガルの植民方法を植民が行われた地域別に植民地支配形態、ポルトガルの海外発展および衰退の原因について検証した。ポルトガルの植民は交易と密接に結びついたものであった。ポルトガルの海外発展の基盤となった植民地は、植民地から流入する商品の市場としての地中海貿易圏、金と奴隷のアフリカ貿易圏、香辛料のインド洋貿易圏、銀と生糸の東アジア貿易圏、ブラジル砂糖貿易の五つの異なる貿易圏に属してい

る。貿易の初期では、アフリカ貿易圏の西アフリカから金が流入し、続くインド洋交易圏では一時期、香料貿易を独占できた。東アジア貿易圏では日本からの銀をマカオで中継貿易し、さらに日本との交易関係が破綻すると、ブラジルでの砂糖生産のために、アフリカ貿易圏から奴隷をアメリカ大陸へと送った。五つの貿易圏は交易品が異なり、機能も違い、時代的にも重ならず、ポルトガルに大きな富をもたらした。ポルトガルの植民方法の特徴は、領域的支配を出来るだけ行わず、海岸線上に城塞都市を建設した交易圏の点の支配である。各地諸侯との友好関係を築き、同盟を結び交易にのみ介入するというポルトガルの植民方法は、ポルトガルの国力に適ったものであった。しかし点の支配とはいえ広大なインド洋交易国を支配し続けることは不可能であったことにより、インド交易は徐々に衰退し始め、香料貿易の衰退とともに、王室の独占は崩れていった。香料貿易で隆盛を極めたポルトガル王室は流入する富を国内に還元することなく、労働力はインド洋交易圏などに流出し、国内産業が成長する土台を築くことが出来なかったことは、ポルトガル衰退の原因であった。また、王室独占による交易によりブルジョアジーの発達が妨げられたこともあげられる。

ポルトガルの15世紀からの大航海時代は、ヨーロッパとアフリカ、アジア、アメリカの世界の国々とのつながりを作った。ポルトガルの初期の外部ヨーロッパ貿易は西アフリカ、アゾレスとマデイラ島、地中海そして北アフ

リカだけにあり、商品はジェノバとヴェニス
の商業ネットワークに集められていた。ポルトガルの海外進出により、世界的な交易ネットワークが創設され、16世紀にギニアで交易をはじめ、インド洋、果ては日本まで交易ネットワークでつながった。貿易を通して東欧にも進出し、ひとつの国から世界的な規模での生産活動が始まった。

その反面、ポルトガルやスペインなどの支配的な国は、従属的な周辺国から資源を取り上げ、結果的に分業化をもたらした。支配や従属という植民地主義を生み出す結果となった。ポルトガルの植民地支配は、植民を行う地域が海岸線上の地域に限られていた。海岸線上の貿易のための補給港、中継貿易地、産品生産地のみでの支配が行われた。交易は王室主導で行われ、オランダやイギリスの東インド会社のような植民会社は存在しなかった。交易ルートを結ぶ点の支配は、ポルトガルの直接支配を受けていたとはいえ、限られた城塞都市の中だけにとどまり、キリスト教布教以外での城塞都市外での文化的影響は少なかったといえる。キリスト教会の支配を受けていたティモールは、ポルトガルの植民地としては例外的な統治が行われた。しかし、産品生産地では、交易品を生産する性格上、砂糖生産地であったブラジル、奴隷供給地であったアンゴラで領域支配となった。

文化面では、ポルトガルは初期の交易でキリスト教布教にあまり力をいれず、各地の文化の保存に積極的であった。これはポルトガルが全体的な支配よりも交易のみに興味を示

したゆえである。しかし、異端審問所の開設など、ポルトガル国内でイエズス会の影響力が濃くなり始めると、次第に植民地にも異教徒弾圧の波が押し寄せる。それでも、宗教以外では現地の文化や習慣に対してポルトガル人は介入しなかった。政治文化の育成やポルトガルからの文化流入は、植民地形成中期から後期にかけて行われているので、この点の解明は、今後の研究課題としたい。